○あらすじ

追い出されるように仕事を辞めた瑞木廉は地元に戻ってきた。懐かしいその場所は傷ついた廉を温かく迎える。敵も刺激もない町で廉は日下部柚と出会った。雨が導いた二人が距離を縮めるにはそう時間はかからず、偶然の出会いが待ち合わせに変わっていく。柚と過ごす時間は冷え固まった廉の心をゆっくりほぐしていった。

平穏を取り戻しつつあった廉の元に元上司の上田が訪れる。勤めていたゲーム会社で発生したバグを修正してくれないかとのこと。仕事に二度と関わりたくなかったが、懇願され、辞めた理由である社員からの嫌がらせや刺すような視線フラッシュバックする。そんな廉を柚は慰めることなくそっと寄り添い、二人で痛みや弱さを分かち合った。

心の支えを得た廉は家族と柚に背中を押され、好きだったゲーム開発を始める。柚と共同制作した作品は公開するやいなやネットで話題に。好きなことを夢中で楽しむ廉の姿を見た柚は絵を描き始めるが、進みだした夢への道は一人で歩かなければならないと気づく。廉と離れることができない柚の背中を押したのは認知症の老婆だった。「幸せであればどうなってもいいのが人生。大切なものは必ず巡り巡って返ってくる」根拠も何もないその言葉に勇気づけられた柚は廉との別れを決意する。廉は懸命に引き留めるが、柚の覚悟を揺るがすことはできない。出会えたことに感謝し、また巡り合えることを互いに願った。

二年後、上田と会社を起こした廉はゲーム博覧会に参加していた。話題になったゲーム会社へのおかげで人気を博す。片づけを終え会社へ戻る途中、廉は雨に降られアトリエに立ち寄る。見て回る廉の歩みを止めたのは柚の絵だった。突然の再会に驚きつつも雨が紡いだ縁に不思議なこともあるのだと二人は笑った。

○登場人物

瑞木廉（２９・３０・３２）元プログラマー
日下部柚（３０・３２）元社畜

瑞木和恵（５５）廉の母
瑞木豊（５８）廉の父
シシャモ　瑞木家のネコ

藤幸三（５８）瑞木家の隣人
藤みつ子（８６）幸三の母・認知症

上田徳茂（４６・４８）廉の元上司
岡本ひより（２５・２６）廉の元彼女
男性社員（３０代）

同僚
女性社員
社長
社員たち

管理人
ゲーム主人公
店員
カップル客
業者

○回想・会社・ビル・廊下（夜）
パソコンと資料の束を持って歩くスーツ姿の瑞木廉（３０）、疲れた様子。
携帯にメールが届き、見る。
岡本ひより（２６）が横切る。
廉「ひよりちゃ―」
遮るように男性社員（３０代）が通る。
男性社員「岡本さん」
ひより、振り返る。
男性社員「ねー、ミス木見なかった？」
ひより「？　誰のことですか？」
男性社員「瑞木だよ、瑞木」
廉、「俺？」という顔。
ひより「変なあだ名～、何ですかそれ」
男性社員「毎日一人でデバックやってるから。俺らのミスを見つけてちまちま直してんの、まあいい気しないよねー。ここダメ、ここもダメって言われてるみたいで。部長はあいつが居ないと回んないとか言ってるけど、こっちとしては居ない方が回るんだよなあ」
ひより「……（愛想笑い）」
男性社員「あっそんなことより。先週末二人で歩いてるとこ見たんだけど、もしかして付き合ってんの？」
ひより、一瞬悩む。
ひより「まさかぁ。偶然会って同じ方向に用があっただけですよ」
男性社員「え～ホントに～？　岡本さん可愛いからストーカーされてるんじゃない？」
ひより「（冗談ぽく）もしそうだったら守ってくれます？」
男性社員「任せてよ～」
廉が持っている資料がはらりと落ちて
ひよりの足元へ。
気づくひより、廉と目が合う。
廉「……」
男性社員、振り返る。
男性社員「え、まじで？」
ひより「……（平静を装う）」
廉の携帯画面にひよりからのメール、

≪再来週の記念日、イタリアン予約しといて≫と表示されている。

○バス・車内・現在
廉、バスの揺れで目を覚ます。
車内に廉を含めて二、三人しかいない。
田んぼが広がる窓の外を見る廉。
タイトル「庭潦」

○バス停
錆びてボロボロのバス停看板の前に、
古いバスが止まる。
廉、スーツケースとボストンバックを
抱えてバスから降りる。
黒い排気ガスを出して発射するバス。
廉、溜息を吐いて歩き出す。
家具を乗せた軽トラ、廉とすれ違う。

○瑞木家・外観
木造二階建ての一軒家。
廉、門扉を開けて入る。

○同・一階・玄関
廉、玄関を開ける。
廉「（小声でぶっきらぼうに）ただいま」
首輪の鈴を鳴らしながらキジトラの猫、
シシャモがやってくる。
廉「（見る）……」
シシャモ、居間へ引き返す。
廉、家に上がる。

○同・居間
母の和恵（５５）、テレビを見ながら見
様見真似でヨガをしている。
シシャモ、和恵にすり寄る。
和恵「あーっシーちゃん邪魔しないで」
ポーズが崩れる和恵、廉に気づく。
和恵「アンタいつの間に？　ただいまぐらい
言いなさいよ」
廉「言ったよ」

和恵、シシャモを膝に乗せる。
和恵「部屋、風を通してただけだから。掃除は自分でしなさいよ」
廉「ハイハイ」
廉、戻る。

○同・廊下から階段
廊下を戻って階段を上がる廉、引っかかるスーツケースを乱暴に引っ張る。

○同・二階・廉の部屋
廉、戸を開ける。
カーテンが開けられ、ベッドに埃避けのシーツがかかっている。
廉、荷物を下ろして窓を開ける。
溜息を吐く廉、片づけを始める。
× × ×
ノックの音。
漫画から顔を上げる廉、戸を開ける。
布団を抱えた和恵が立っている。
和恵「はい（渡す）」
廉、受け取る。
和恵「シーちゃんが来る前に閉めなさいよ」
廉「……ん」
階段に向かう和恵、降りる。
廉、布団をベッドに置く。
和恵（声）「夕飯何がいいー？」
廉、部屋から顔を出して。
廉「何でもいいよー」
和恵（声）「それが一番困るのー！」
廉「……（めんどくさいな）」
和恵（声）「いなり寿司でいいー？」
廉「決まってんじゃん……。いいよー！」
和恵（声）「あっシーちゃん！　シシャモそっち行った！」
廉「はーい」
廉、戸を閉める。
シシャモ、戸を掻く。
廉「開けないよ」
シシャモ（声）「にゃあーん」

ベッドに倒れる廉、溜息を吐いて目をつぶる。

○同・一階・居間（夕）
食卓の上に大皿に盛られたいなり寿司。
廉、台所から皿に盛ったシシャモのエサを持ってくる。
シシャモ、廉の足にまとわりつく。
廉「あぶな」
廉、床に皿を置く。
シシャモ、がっつく。
廉、見ている。
和恵、取り皿と箸を持ってくる。
和恵「お父さんがおやつをあげすぎるから、シーちゃんちょっと太っちゃったの」
廉「ふーん」
玄関が開く音。
和恵「噂をすれば」
和恵、台所へ戻る。
ツナギ姿の父、豊（５８）が顔を出す。
豊「ただいまー。（廉に）おっ帰ってたか」
廉「おかえり」
豊「ただいま。シシャモーお父さんだぞー」
シシャモ、無視。
和恵、味噌汁を運んでくる。
和恵「おかえりなさい。ご飯にするから手を洗ってきて」
豊「はーい」
豊、洗面所へ。
× × ×
シシャモ、いなり寿司に興味津々。
豊「廉、あれ持って帰ってきたか？」
廉「あれ？」
豊「あのかっこいい自転車だよ。（ハンドルを握る動作）どこに置いたんだ？」
廉「マウンテンバイクか、売ったよ。ここじゃいたずらされるか盗まれるかどっちかだろ」
豊「なんだ……。父さん、一回乗ってみたかったな……」

和恵「お父さんじゃ足着かないでしょ」
豊「そうかあ？　廉とそんな変わらないと思うけどな」
廉「……」
豊「まあ、なんだ。しばらくゆっくりすればいいさ」
廉「……うん」

○同・二階・廉の部屋（夜）
戸を開ける廉、スーツケースに入ったままのノートパソコンに気づく。
廉「……（手を伸ばす）」
× × ×
フラッシュバック
オフィス内。
飛んでくる睨むような嫌な視線。
× × ×
廉、スーツケースを閉じる。
部屋に入ってくるシシャモ、ベッドに飛び乗る。
廉、シシャモをどかして布団に入る。

○同（日替わり）
廉、大きな音で飛び起きる。
隣で寝ていたシシャモ、逃げていく。

○同・一階・台所
廉、駆け足でやってくる。
廉「何の音！？」
和恵「ああ、おはよう。って言ってももうお昼だけど！」
和恵、パン生地を台にぶつける。
廉「うるさっ」
和恵「しょうがないじゃない必要な工程なんだから！（ぶつける）」
廉「……苦情来るよ」
和恵「来るわけないでしょ。アンタが住んでた都会じゃないんだから」
和恵、生地をこねる。
オーブンが鳴る。

和恵「おっ焼けた焼けた。（廉に）ほらほら出して」
廉「え（めんどくさい）」
和恵「焼きたて、美味しいわよ～」
廉「……（興味ある）」
廉、渋々鍋掴みをはめる。

○同・居間
廉、パンを食べる。
廉「うま」
和恵「でっしょー（ドヤ顔）」
和恵、お茶を淹れる。
和恵「食べ終わったらお使いに行ってくれない？　今夜唐揚げにしようと思うんだけど片栗粉が少なくて」
廉「あー……いいよ。車？」
和恵「あっお父さん乗ってっちゃった」
廉「え、じゃあ何、歩き？」
和恵「（考えて）自転車ならあるけど」
廉「……（嫌な予感）」

○同・中庭
着替えた廉、縁側に座って待っている。
和恵、空気が抜けて錆びだらけの自転車を引きずってくる。
廉「うわ何これ。外に出しっぱなしにしてただろ」
和恵「倉庫がもういっぱいで」
廉「タイヤもぺしゃんこだし、うちに空気入れあった？」
和恵「あっ（ない）」
廉「……（ないのか）。いいよ、歩いて行ってくる」
和恵「ついでにお醤油もお願い」
廉「わかった」
和恵「よろしく～」
廉、門扉へ。

○同・前
廉、門扉を閉める。

隣の家から藤幸三（５８）が出てくる。
幸三「あっ廉くん、こっち戻ってたんだ。いやあ大きくなって。え、今何歳？」
廉「三十です」
幸三「はー、もうそんなかあ。早いねー。あっそうだ、うちのばあさん見てない？　最近ちょっと徘徊ひどくてさあ」
廉「見てないです」
幸三「だよね、ありがと。まったくどこ行ったんだか。どっかで見かけたら電話してくれる？」
廉「はい」
幸三「ごめんねー、助かるよ」
廉「いえ」
廉、会釈して歩き出す。

○スーパーかきや・外観
色褪せたのぼりと塗装が剥げた看板。
二階のパソコン教室の窓に講師募集の張り紙。

○同・店内
廉、片栗粉を探す。

○瑞木家・中庭
洗濯物を取り込む和恵、家に上がる前にふと立ち止まって空を見上げる。
和恵「傘持っていったっけ……？」

○田んぼ脇・砂利道
空に黒い雲が広がっている。
廉、荷物を持って歩く。
突然雨が降り始める。
廉、駆け足。

○バス停・待合スペース
木で造られた小屋。
駆けてくる廉、一息ついてベンチに座る。
廉、だらけて雨を見ている。

日下部柚（３０）が駆けてくる。
驚く廉、柚と距離を取るように姿勢を正す。
柚「こんにちは、すごい雨ですね」
廉「（会釈しながら）こんにちは……」
柚「お買い物した帰りにいきなり降ってきてもうびっくりしました。さっきまでいい天気でしたよね？」
にこにこ話す柚の引き気味の廉。
廉「……この町の方じゃないんですか？」
柚「あ、そうです。ついこの間引っ越してきて」
廉「こんな田舎に？」
柚「（にこっ）いいところですよね」
柚、バス停看板に気づいて。
柚「あ、バス停か。居ても大丈夫かな」
廉「二時間に一本しか来ませんから」
柚「ならよかったです」
柚、空を見上げている。
柚「止みますかねー、これ。私、大家さんに挨拶をしに行く約束をしていて、遅れると申し訳ないんですよね」
廉「止みますよ、にわか雨なので」
柚「これでですか？」
廉「この町、雨が多いんで」
柚「へー……そうなんですね」
柚、ベンチに腰掛けるがそわそわして落ち着かない。
廉「……橋、渡りますか？」
柚「橋？」
廉「この先にある木の橋です」
柚「あ、渡ります」
廉「あそこ雨が降ったら渡らない方がいいんです。狭いしボロいんで。大家さんも雨が降ったって知ってるんだし、急がなくて平気ですよ」
柚「優しいんですね」
廉「のんきなんですよ、皆」
雨の勢いが弱まっていく。
雲の隙間から青空が覗く。

柚「止みましたね」
廉「水たまりには気を付けてください。中には深いのもあったりするので」
柚「はい、ありがとうございます」
柚、待合スペースを出る。
廉、荷物を持つ。
柚、水たまりを飛び越え、廉に向かって大きく手を振る。
廉、思わず笑う。

○瑞木家・一階・玄関
廉「（開ける）ただいま」
和恵、台所から駆けてくる。
和恵「おかえり。ああやっぱり」
和恵、荷物を持つ。
和恵「お風呂沸かしといたから」
廉「あー……、（ボソっと）ありがと」

○同・居間（夕）
食卓に唐揚げとご飯、味噌汁、漬物が並ぶ。
和恵「（隣を指さしながら）藤さんのお母さん、認知症ですぐどっか行っちゃうんだって。苦労してるみたいだからちょっと気にしてあげて」
豊「今日はどこに居たって？」
和恵「それが押し入れで寝てたんだって。そりゃ外探しても見つかんないわけだわ」
豊「あの噂好きが静かになったと思ったら徘徊か」
和恵「そこは変わってないわよ。この間なんてスーパーのレジの人に店長とはどう？なんて聞いてたんだから。そんなのもう昔の話で店長代わってるのに。つい最近のことだと思ってんの」
豊「あのばあさん、色恋沙汰大好きだからなあ」
シシャモ、から揚げに手を伸ばす。
廉、防ぐ。

○同・二階・廉の部屋（夜）
ベッドに座って漫画を読んでいる廉、
シシャモが膝に乗ってくる。
廉、仕方なく受け入れる。
携帯からメッセージの受信音。
廉、間をおいてから見る。
差出人はひより。
携帯を置く廉、シシャモと布団に入る。

○瑞木家・二階・廉の部屋（朝）
シシャモ、廉に向かってダイブ。
廉「うぐっ」
廉、起きる。
シシャモ「んなああああ」
廉「何？　腹減った？」
シシャモ「なむなむ」
シシャモ、廉の部屋から出る。
廉、後を追う。

○同・一階・廊下から玄関（朝）
廉、階段を下りる。
和恵、前を通り過ぎる。
廉「おはよ」
和恵「（振り返る）ああ、おはよ。今日は早いじゃない」
廉「シシャモに叩き起こされて」
和恵「あっシーちゃんのご飯まだだった。（シシャモに）ごめんねー」
和恵、シシャモを撫でる。
和恵「もう行かなきゃいけない時間だからあとよろしく」
廉「どこ？」
和恵「パート。シーちゃんのご飯代稼がないと」
廉「へー……」
和恵、玄関へ。
廉、シシャモを見て。
廉「愛されてんな、お前」
シシャモ、居間へ。
和恵「四時には帰るから。行ってきまーす」

廉「いってら」
和恵、家を出る。
シシャモ（声）「にゃあああ」
廉「はいはい」

○同・居間（朝）
廉、エサ皿を置く。
シシャモ、食べる。

○同・台所（朝）
廉、焼きそばを作っている。
台所にやってくるシシャモ、廉の足元をうろうろ。
廉「お前のじゃないよ」
シシャモ、廉の体をよじ登る。
廉「あぶなっ」

○同・縁側
廉、外を眺めて焼きそばを食べる。
×　×　×
廉、おもちゃでシシャモと遊ぶ。
洗濯物がたなびく。
空は快晴。
×　×　×
寝転んでいる廉、うつらうつら。

○回想・会社・オフィス（朝）
対向式にデスクが並ぶ綺麗なオフィス。
出勤する廉。
廉「おはようございます」
廉に視線が集まる。
廉、顔を伏せながらデスクへ向かう。
椅子に座り、パソコンの電源を入れると始まるブラウザクラッシャー。
廉、電源を落とす。
クスクスと笑う声。

○瑞木家・一階・縁側（夕）
廉、目を覚ます。
空が暗い。

体を起こす廉、外を見て洗濯物を取り込む。
雨が降り出す。
廉、洗濯物を畳む。
シシャモ、タオルの上でくつろぐ。
ひよりからの着信。
廉、咄嗟に携帯を伏せる。
雨が強くなる。
和恵、駆け足でやってくる。
和恵「ただいまー。あ、よかった。ありがと」
廉「（はっとして）おかえり」
和恵「ただいま」
シシャモ「なー（すりすり）」
和恵「んーなあにーおやつほしいの？」
和恵、シシャモと居間へ。
廉、洗濯物を畳む。
伏せたままの携帯。

○同・居間（夕）
食卓に唐揚げ丼と味噌汁、酢の物が並ぶ。
和恵「そういやアンタ、パソコン得意よね」
廉「……、え」
和恵「あとでバックアップやってくれない？なんか上手くいかなくて」
廉「あー、それくらいならまあ」
豊「母さんはシシャモの写真いっぱい撮るからなあ」
和恵「シーちゃんかわいいもんねー」
シシャモ、から揚げが気になる。
豊、から揚げをシシャモにあげようとする。
和恵「ダメ！　塩分高いんだからシーちゃんの体に悪いでしょ！」
豊「（シシャモに）ごめんなあ」

○同（夜）
食卓に置かれたノートパソコンを見ている廉。
和恵「なあに見てても電源は入んないわよ」

廉「……うん」
シシャモ、廉の膝に乗る
シシャモを撫でる廉、パソコンを開く。

○マンション・元廉の部屋・前（夕）
しつこくチャイムを押すひより。
管理人「そこ、空き家ですよ」
驚くひより、掃除用具を持った管理人を見る。
ひより「……いつ居なくなったんですか？」
管理人「三、四日ぐらい前に。突然引っ越して行かれました」
ひより「……」

○瑞木家・一階・居間と縁側（夜）
縁側に居る廉、シシャモを撫でている。
台所から出てくる和恵。
和恵「もう終わったの？」
廉「うん」
和恵、パソコンを確認。
和恵「あっ壁紙シーちゃんになってるーかわいいー」
廉、ふっと笑う。
携帯に着信。
廉、電話が切れるのを待つ。
電話が切れる。
廉、恐る恐る着信履歴を見る。
ひよりから不在着信が十件。
廉、携帯を持って玄関へ。

○同・玄関（夜）
廉、靴を履く。
和恵、居間から顔を出す。
和恵「どこか行くの？」
廉「……散歩」
廉、家を出る。

○スーパーかきや・外（夜）
柚、スーパーから出る。

月が雲で隠される。

○田んぼ脇・砂利道（夜）
廉、ぼんやり夜空を見上げている。
静かに雨が降り始める。
俯く廉、動かない。
後ろから駆けてくる柚、廉の腕をつかんで走る。

○バス停・待合スペース（夜）
二人、駆けこんでくる。
柚「また降られましたね」
柚、楽しそうに笑う。
廉「ありがとう、ございました」
柚「いえいえ」
廉の携帯にひよりから着信。
廉、画面を見るが出ない。
柚「出ていいですよ？」
廉「いや……」
電話が切れる。
柚「よかったんですか？」
廉「（ほっとする）はい」
廉、ベンチに座る。
柚、同じく座る。
柚「お散歩ですか？」
廉「……、そうです」
柚「ここはお散歩に最適ですよね。誰も居ないし、ゆっくりぼんやりできて」
廉「雨には降られますけど」
柚「（笑う）そうでした」
二人、雨を眺める。
柚「この町、皆いい人ですよね。実家じゃないのにそれに似た雰囲気があるっていうか。和むっていうか」
柚、買い物袋を持ち上げる。
柚「閉店時間前だからって残ったお惣菜とか期限が近いお野菜をもらったんです。前に住んでいたところじゃ考えられないですよ」
柚、袋からトマトを出す。
柚「こんな大きいトマトあっちじゃ滅多に見

ないです」
柚、嬉しそうに笑う。
廉、つられて口角が少し上がる。
雨脚が強くなる。
柚、雨を見て。
柚「止みませんね」
廉「（見る）この町ですから」
少しの間沈黙。
柚「止むまで独り言喋ってもいいですか？」
廉、柚を見る。
柚、トマトを見ている。
柚「私、仕事から逃げるようにこっちに来たんです。引継ぎもしないで、辞表を上司の机に置いて」
柚、トマトを指で撫でる。
柚「大した仕事してなかったので迷惑はかけてないと思うんですけど、少しだけ後悔しているんです。まだ頑張れたんじゃないかなとか、全部捨てちゃってよかったのかなとか。一人になるとずっと考えてしまって……」
雨の勢いが弱まる。
柚、外を見る。
雨が止む。
柚「止みましたね」
柚、トマトをしまう。
廉、外を見る。
柚「（立つ）独り言、聞いてくれてありがとうございました」
会釈する柚、帰っていく。
廉、座ったまま見送る。

○瑞木家・一階・居間（夜）
風呂上がりの廉、寝転がっている。
和恵、顔に保湿パックを貼る。
和恵「アンタそんなとこに寝てたら爪とぎされるよ」
廉「（ぼんやり）んー……」
シシャモ、廉の背中に爪を立てる。
廉「いって！」

廉、起き上がる。
シシャモ、逃げる。
和恵「ほら言わんこっちゃない」
廉、背中をさする。
廉「爪とぎの場所教えてるよね」
和恵「人が寝てなきゃちゃんとした所でやるよ」
廉「何、わざと……？」
シシャモ、優雅に毛づくろい。
和恵「アンタこそ、いきなり散歩行ったと思ったらビショビショで帰って来て何なの」
廉「何なのって……」
廉、ふと思い出したように。
廉「……あのさあ、女の人の喋るだけ喋って満足する感じあれ何。全く解決してないのに」
和恵「そんなのそれでいいからに決まってるでしょ。解決なんて求めてない。聞いてもらってすっきりしたらそれで終わり」
廉「へー……」
和恵「……ん？　こんな田舎にアンタと話す女の子なんて居た？」
廉、しれっと居間を出る。
和恵「あっちょっと！　話はまだ終わってないでしょ！」
シシャモ、和恵にすり寄る。
和恵「シーちゃんダメ！　毛がついちゃうから！」
シシャモ「んな～」

○同・二階・廉の部屋（夜）
ベッドの上に置いてある携帯に着信。
画面には上田さんの文字。
部屋に入る廉、気づく。
廉、悩んだ末、電話に出る。
廉「はい」
上田（声）「久しぶり、元気でしたか？」
廉、ベッドに腰を下ろす。
廉「はい……元気です、一応」
上田（声）「そう、よかった」

廉、俯く。
廉「何か、用ですか？」
上田（声）「うん、その……、今はまだ退職願が正式に受理されてない段階で、瑞木くんは有給扱いになってるんだ」
廉「そうですか」
上田（声）「うん……。いや、こんなことを言いたいんじゃなくて、えっと……、会社に戻ってきてほしいんだ」
廉「……すみません、戻るのは―」
上田（声）「うん、そうだよね。……うん、わかってる。でも、少しだけ考えてくれないかな」
シシャモが戸を掻く。
廉、顔を上げる。
廉「あの、ごめんなさい来客が。すみません、失礼します」
電話を切る廉、戸を開ける。
シシャモ、ベッドに乗る。
廉、戸を閉めてベッドに座る。
廉「助かったよ」
シシャモ、あくび。

○同・一階・台所（朝）
和恵、煮物を作っている。
シシャモ、和恵の足にすり寄る。
和恵「シーちゃんおはよー」
和恵、シシャモを抱き上げる。
和恵「ん？　廉は？」

○バス停・待合スペース（朝）
廉、ベンチで横になっている。
柚「こんにちは、いい天気ですね」
廉、目を開ける。
柚、微笑む。
微笑み返す廉、体を起こす。
廉「散歩日和ですね」
廉の携帯に上田から着信。
二人、携帯を見る。
廉、携帯を取ろうとしない。

柚「出ないんですか？」
廉「……出たくなくて」
柚「なるほど」
電話が切れる。
柚「雨が降りそうなので、少しの間お邪魔します」
柚、廉の隣に座る。
廉、晴れている空を見る。
廉「……その間、独り言に付き合ってもらってもいいですか？」
柚「（にっこり）いいですよ」
廉「今の、上司からの電話なんです。もう辞めたので元ですけど。昨日、会社に戻ってこないかって言われて」
廉、深い溜息。
廉「戻る気はないんです。戻れる場所もないし、歓迎されないのわかっているんで。なのに何を考えているんだか……」
廉の携帯にひよりから着信。
柚「人気者ですね」
廉「これは嫌がらせですよ」
柚「あ、もしかして（彼女？）」
廉「……いや、もう終わってます」
廉、画面を伏せる。
携帯を見る柚、電話に出る。
柚「はい。……いえ違いますけど。今、手が離せないので用件だけ仰っていただければ伝えておきますが」
廉、驚いてる。
柚、携帯を耳から離す。
柚「切られちゃいました。お母さんですか？って言われたんですけど、私の声そんな老けてます？」
柚、廉に携帯を返す。
廉、じわじわと笑いがこみ上げる。
廉「そんなことないですよ。（受け取る）素敵な声してます」
柚「お世辞にしか聞こえませんけど」
廉「本当ですって」
廉、しばらく笑っている。

柚、つられて笑う。
廉「ありがとうございます。少し気が楽になりました」
柚「それはよかったです」
手押し車を押しながら歩く藤みつ子（86）、待合スペースの前を通る。
廉「（気づく）あれ」
廉、立ち上がって。
廉「みつ子さーん」
みつ子、気づかない。
柚「お知り合いですか？」
廉「お隣さんです。認知症で徘徊癖があるみたいなんですけど、こんなとこまで来てるなんて。ちょっと、すみません」
廉、駆け足でみつ子を追う。

○田んぼ脇・砂利道（朝）
廉「みつ子さん！」
足を止めるみつ子、振り返る。
みつ子「豊くんかあ？」
廉「それは父さんだよ。俺は息子の廉」
みつ子「（耳に手を当てて）えー？」
廉「廉だよー！」
みつ子「ああ、廉くんか。大きくなって」
廉「こんなとこまで歩いて疲れたでしょ。迎え呼ぶからちょっと休んでいきな」
みつ子「（頷きながら）へいへい」
廉、みつ子と一緒に待合スペースへ。

○バス停・待合スペース（朝）
戻ってくる二人。
みつ子「アンタいつ戻ってきたんね」
廉「つい最近だよ。（ベンチを指して）ここ座っときな」
柚、みつ子に手を貸す。
みつ子「ありがとね」
柚「いえ」
みつ子、座る。
廉「幸三さんに電話するからねー」
廉、電話を掛ける。

みつ子、柚を見て微笑む。
柚、微笑み返す。
みつ子「いい嫁さん貰ったねえ」
廉「え！？　違うよ！　違う違う」
みつ子「なあに、そんな照れなくたっていいって」
廉「本当に違うんだって。（電話に）あっもしもし、幸三さん？」
廉、電話に向かって話す。
みつ子「（柚に）お名前はなんて言うの？」
柚「柚です」
みつ子「そう、柚さん。今は昔と違ってお相手を選べるでしょう？　なら離しちゃダメよ。周りがなんて言おうと二人が幸せならそれでいいんだから」
柚「（面白がって）はい」
廉「（切る）幸三さんが迎えに来るって言うから、もう少しここで待ってようか」
みつ子「はいはい」
×　×　×
前に止まる軽トラ、幸三が降りてくる。
幸三「ごめん遅くなって。（みつ子に）母さん帰るよ」
みつ子「（耳に手を当てて）えー？」
幸三「帰るよー！」
みつ子「ああ、はいはい」
幸三、みつ子を軽トラに乗せる。
幸三「（振り返って）乗ってく？　後ろでよければ送ってくよ。お嬢さんも」
廉「あ、大丈夫です」
柚「私も、すぐそこなので」
幸三「そう？　でも―」
みつ子「お邪魔虫が！　蜜月の邪魔をしないの！　アンタ何しに来たんだい！」
廉、ん？　という表情。
幸三「母さん迎えに来たんだけど……。まあいいや、（廉に）ありがとね！」
幸三、軽トラに乗って車を出す。
気づく廉、顔が青ざめる。
廉「ごめんなさい……」

柚「えっどうしたんですか」
廉「あのおばあちゃん、人の色恋沙汰大好きな人で誰かれ構わず話す癖があって。すみません、もっと強く否定しておけば迷惑を掛けずに済んだのに」
柚「あー（微笑む）いいですいいです。私、こっちに来たばかりで迷惑になることなんて何もないので。それに可愛い噂じゃないですか。気にしないでください」
廉「でも、何も知らない俺となんて……」
柚「あっじゃあ、名前だけ教えてもらってもいいですか？」
廉「……名前」
柚「はい」
廉「あ、そっか。（笑う）そういや言ってなかったですね」
柚「（笑う）お互いに」
廉「廉です。瑞木廉」
柚「廉さん。日下部柚です」
笑う二人。
柚「よろしくお願いします」
廉「こちらこそ」
二人、軽く会釈。
廉「夫婦だと思われた二人が今日、初めて名前を聞いたなんておかしな話ですね」
柚「ここでしか会っていないのに」
廉「そうでした」
柚、空を見て。
柚「今のうちにお買い物に行ってきますね」
廉「はい、お気をつけて」
柚「ではまた、ここで」
廉「また、ここで」
柚、スーパーへ向かう。
廉、見送る。

○瑞木家・一階・玄関（朝）
廉、戸を開ける。
廉「ただいま」
和恵、台所から走ってくる。
和恵「ちょ、ちょっとちょっとアンタ！　お

嫁さん連れて帰ってきたって！　どこどこ！　ねえ！　どこ！？」
廉「（笑って）居るじゃん」
　廉、和恵の足元を指さす。
和恵「（パニック）えっ？　え！？」
　廉、笑いながら家に上がる。
和恵「ねえどういうこと！？」
シシャモ「にゃあーん」
　和恵の足元にシシャモ。
　和恵、廉を見る。
　廉、笑いながら居間へ。
和恵「（気づく）れーんー！」

○同・居間
　和恵、ムスッとした顔でテレビを見ている。
　廉、二人分のカルボナーラを食卓に置く。
廉「みつ子さんの言うことを信じたのは母さんだろ」
和恵「だってぇ。ちょーっとくらい期待したっていいじゃない」
廉「何を期待すんだよ」
　廉、和恵にフォークを渡す。
　和恵、受け取る。
和恵「シーちゃんだって迷惑よね？　男の子なのに失礼しちゃう」
　シシャモ、カルボナーラを見ている。
和恵「（はっとして）アンタ……！」
廉「（無視）いただきます」
　廉、カルボナーラを食べる。
　興奮した顔で廉を見ている和恵、ふと冷静な顔になって。
和恵「ないか。アンタ昔、リッコちゃんと付き合ってたもんね」
　廉、むせる。
廉「いつの話をして……」
和恵「あれ、リッコちゃんだっけ？　ミズキちゃんだっけ？　結婚したらミズキミズキになっちゃうねーなんて言ってたような…

…」
廉「それ中学の時の話だろ。よく覚えてるな
…」
和恵「だって高校に入ってからの彼女知らな
いんだもん！　誰が好きとか誰と付き合っ
てるとか全く言ってくれなくなったのは廉
でしょ！」
廉「誰が言うかよ」
和恵「恥ずかしがっちゃって。（食べる）何こ
れおいし！　ここじゃ一回も台所立たなか
ったのに」
廉「一人暮らし長ければ料理ぐらいするよう
になるよ」
和恵「彼女に作ってもらったりは？」
廉「（考える）しなかったな」
和恵「へ～（にやにや）」
廉「何だよ。今はもう居ないよ」
和恵「（残念そうに）あーそっ」
和恵、テレビを見る。
廉、台所へお茶を取りに行く。
シシャモ、追う。
放置された携帯に上田からの着信。

○同・台所
廉、皿をシンクに置く。
チャイムが鳴る。
和恵（声）「はーい」
廉、洗い物をする。
和恵、走ってくる。
和恵「廉！　廉！」
廉「何？」
和恵「お客さん！」
廉「あー……まだ急須洗ってないから使える
―」
和恵「違う！　廉に！」
廉、振り返る。
スーツ姿の上田徳茂（４６）、台所に入
る。
上田「こんにちは」
驚く廉、固まる。

蛇口から水が流れ続ける。
×　×　×
水を止める和恵、タオルで手を拭く。
○同・居間
上田「突然押しかけて申し訳ない。どうしても力を貸してほしくて」
廉「俺ができることなんて何もないです」
上田「いいや、瑞木くんにしかできないことなんだ」
上田、鞄からノートパソコンを出して開く。
廉、顔をそらす。
画面には教室内でバグって固まっている学生服姿のキャラクター。
上田「何をしてもここから動かないし、音楽もムービーも流れない。お願いだ、助けてほしい」
廉「……」
上田「無茶を言っているのは重々承知している。けれどあの会社でこれを直せる人はもう居ない。すべてのデバッグを受け持っていた瑞木くんが最後の望みなんだ」
廉、ゆっくり手を伸ばす。
上田、期待に満ちた目で廉を見る。
廉、パソコンを閉じる。
廉「……すみません」
上田「どうしても、無理かな」
廉「……画面が、無理なんです。仕事と関係なければ見れるけれど、……ごめんなさい」
上田「……それは―（申し訳ない）いや、ごめん。そもそも社内で解決しないといけないことなのに」
シシャモ（声）「にゃー」
やってくるシシャモ、廉にすりすり。
上田「かわいいね」
上田、シシャモに指を差し出す。
シシャモ、匂いを嗅ぐ。
廉、シシャモを見ながら。
廉「……上田さんが組み直してくれるなら―」

上田「……！」

×　×　×

シシャモを膝に抱えた廉、上田に指示を出す。

上田、懸命に作業をする。

シシャモ、あくびして眠る。

○同・玄関

上田、靴ベラを使って靴を履く。

上田「やっぱり瑞木くんが抜けた穴は大きいね」

廉「……すみません」

上田「いやいや、今まで一人に任せてたツケが回ってきてるだけだよ」

立ち上がる上田、靴ベラを返す。

廉、受け取る。

上田「僕はね、このプロジェクトが終わったら会社を辞めようと思っているんだよ」

廉「え……」

上田「どこかいい所があればいいんだけど。まあ、この歳じゃ難しいよね」

上田、玄関を開ける。

上田「今日はありがとう」

廉「あ、……傘（出す）持って行ってください。もうすぐ雨が来ますから」

上田、空を見上げて。

上田「こんないい天気なのに？」

廉「そういう町なので」

上田「そう？　なら……（受け取る）」

廉「……お気をつけて」

上田「瑞木くん」

廉「はい」

上田「君にはゲームの才能があるよ。凡人の努力じゃ到底かなわないものを、瑞木くんは持ってる。会社に戻らずどこかほかの場所で発揮してもいいと思う。それは瑞木くんの自由だから。ただ、眠らせておくのはすごくもったいないよ」

空が暗くなっていく。

上田「じゃあ、今日は本当にありがとう」

上田、去る。

○同・居間
廉、寝転がっている。
シシャモ、廉の背中に寄り添って眠る。
豊「廉！　廉！　あったぞー！」
廉、驚いて起きる。
シシャモ、逃げる。
豊、騒がしく居間に入ってくる。
廉「えっ何、ってか仕事は？」
豊「有給取っちゃった」
廉「え……」
豊、鞄をごそごそ。
豊「これこれ、（出す）廉が初めて携わったゲーム！　一緒にやってみたくて。お店十件も回っちゃったよ」
廉、意気揚々とゲームの準備をする豊を見ている。
× × ×
フラッシュバック。
会社の廊下の一角に自販機とベンチが置かれた奥まった休憩スペース。
ベンチに置かれた廉のパソコン。
廉、資料を片手に戻ってくる。
パソコンの画面に悪口のポストイットがびっしり貼られている。
× × ×
廉「……ごめん、無理」
豊「え？」
廉、居間から出る。

○バス停
バスを待っている上田、雨が降り出す。
上田、傘をさす。
到着するバスに乗る。

○同・待合スペース
俯いて座っている廉の足元に水たまりができている。
廉の髪からしずくが落ちる。

○回想・会社・休憩スペース（夕）
自販機で飲み物を買う同僚に近づく廉。
廉「学園ホラー、まだかかる？」
同僚「（驚く）あー……、いや、見なくていいよ。こっちだけでなんとかなるし」
廉、飲み物を持ってそそくさと去ろうとする同僚を止めて。
廉「何で？　噂のせい？」
同僚「わかってんなら聞くよ……」
廉「仕事には関係ないだろ」
同僚「信用できないんだって。問題あるやつに仕事回すわけないって」
廉「……誤解なんだって」
同僚「もしそうだとしても、火がない所に煙は立たないって言うじゃん……」
同僚、去る。

○回想・同・社長室
座っている社長の前に立つ廉と上田。
社長「上田くんは出張に行ってたから知らないかもしれないけれど、最近社員の間で変な噂があってね」
廉「……（呆れ気味）」
上田「聞きました。でもそれは根も葉もないただの噂です。部下にはきっちり注意しましたし、何より瑞木がどれだけ優秀な社員か社長が一番ご存じですよね？」
社長「そ、それはわかっているよ。ただね、うちはまだ小さな会社だから、クライアントからの信頼は大切にしたいし、……世間に知られたらと思うと……（ちらちら）」
静かに息を吐く廉、社長を見て。
廉「辞めます」
社長と上田、驚いて固まる。
廉、内ポケットから退職願を出す。
廉「お世話になりました」
廉、頭を下げて社長室を出る。

○回想・同・廊下

社長室から出る廉、歩く。
会議室から出てくるひよりと社員たち。
女性社員「いいじゃん、ひよりちゃん彼氏いないんでしょ～？」
ひより「んー（あいまいに笑う）」
女性社員「合コン行こうよー、人数足りないんだって。お願い」
ひよりと廉、すれ違う。
ひより、廉を目で追う。
廉、振り返らない。
社長室から飛び出す上田、廉を見つけ。
上田「（あ）み―」

○バス停・待合スペース・現在
柚「廉さん」
廉、顔を上げる。
ケーキの箱と傘を持っている柚、廉の横に座る。
廉、不思議そうに柚を見る。
柚、雨を見て。
柚「これじゃ帰れないですね」
廉、雨を見る。
外が見えないほどの土砂降り。
柚「止むまで付き合ってもらえますか？」
柚、ハンカチを差し出す。
廉「……（受け取る）はい」
廉、ハンカチで軽く拭く。
雨を見る二人。
廉「俺が女性社員のストーカーをしていると噂されたんです。本当は付き合っていたんですけど、周りに言ってなかったので何もできず……」
廉、ハンカチを返す。
廉「弁解しようとしても、火がない所に煙は立たないと言われたら終わりですよね」
柚「煙なんて火がなくても簡単に立つじゃないですか」
廉、柚を見る。
柚、ケーキの箱から保冷剤を出す。
柚「恨みや妬み、悪口を詰め込んで悪意のド

ライアイスを作るんです。これを嫌いな人のそばに置けば（ベンチに置く）勝手に煙が立ちます。あとはこんなことされた、みたいなこと言ってそれっぽい噂を流せば同調圧力で勝手に敵が増えていきます」
廉、保冷剤を見ている。
柚「廉さんは何も悪くないですよ」
廉「……」
ふっと笑う廉、俯いて静かに涙を流す。
柚、しばらく雨を見ている。
柚「春の雨っていいですよね。一年の汚れを落としてるみたいで、私は好きです」
廉、涙を拭って顔を上げる。
廉「花も散りますけど」
柚「（笑う）そこだけ残念です」
柚、ケーキの箱を差し出して。
柚「一緒に食べませんか？」
廉「えっ」
箱の中にはアップルパイとイチゴのショートケーキが入っている。
廉「でもそれ、誰かのために買ったんじゃ」
柚「私が両方食べたいから買ったんです」
廉、驚く。
柚「だってどっちもおいしそうじゃないですか。選びきれなかったので両方買いました。大人買いです（ドヤ顔）」
廉、笑う。
廉「大人買いっていうのはもっと、端から端までっていうのじゃないんですかね」
柚「食べきれない量を買ってもしょうがないですよ。（ケーキを見せて）どっちがいいですか？」
廉「……いや、俺が選ぶのはなんか……」
柚「私も選べないですし」
廉、悩む。
廉「（冗談で）半分ずつにします？」
柚「いいですね、そうしましょ！」
廉、うそでしょと言う顔。
廉「まじか……」
柚、ショートケーキを差し出して。

柚「かぶりついてください」
廉「えっ！？」
柚「フォークないので」
廉、覚悟を決めてかぶりつく。
廉、口の周りがクリームだらけ。
廉、袖で拭こうとする。
柚、止めてハンカチでふき取る。
廉、照れくさそうに会釈。
微笑む柚、アップルパイを差し出す。
廉、食べる。
廉「ん、こっち好きです」
柚「廉さんが甘党でよかった」
柚、ショートケーキを食べる。
廉、口の周りに着いたパイ生地を払う。
柚、包装紙を丸めてアップルパイを手に取る。
柚「会社に居た頃、桃のショートケーキを買っていたんです」

○回想・ケーキ屋
柚（N）「缶詰じゃないのを毎日、頑張ったご褒美に」
柚、ケーキの箱を受け取って店を出る。

○回想・柚の昔の部屋（夜）
柚（N）「でも家に帰ると疲れて食べる元気がなくて」
ふらふらの柚、家に入る。
柚（N）「冷蔵庫に入れようと思って開けたら、中が全部ケーキの箱で埋められてたんです」
柚、冷蔵庫を開けて固まる。
柚（N）「もう何も入れる隙間がないくらいぎゅうぎゅうで。その時、何してんだろうって思っちゃって」
白い箱でいっぱいの冷蔵庫。
その前で座り込んでいる柚。

○バス停・待合スペース
柚「残業もですけど上司や同僚からの暴言が

一番きつくて。毎日怒鳴られて、いかにダメな人間かを聞かされると感覚が麻痺していくんです。だから私、人との距離がちょっとまだわからなくて、嫌な思いしてたらすみません」

廉「いえ……」

柚、銀紙を丸める。

柚「こっちに来てから少しずつ治っていると思ってたんですけど、まだダメですね。……自分の価値とか意味もわからなくて、……深い海に沈んでいっていくような、そんな感じがするんです」

廉「……俺も溺れているんで、一緒です」

柚、廉を見る。

廉、保冷剤を見ている。

廉「柚さんが今、ここに居てくれてよかったって思ってます」

泣きそうな顔で笑う柚、廉の肩にもたれかかる。

二人、雨を見ている。

指先が触れ合う。

雨の勢いが弱まっていく。

二人、自然に手を繋ぐ。

廉「雨、止みそうですね……」

柚「……止んでも、一緒に居てほしいです」

廉、柚を見る。

柚、廉を見る。

廉、ゆっくり顔を近づける。

柚、目を伏せる。

二人、キスをする。

廉、顔を離して柚を見る。

柚、真っ直ぐ廉を見つめる。

二人、もう一度キス。

○アパート・柚の部屋

机と本棚が置かれた畳の部屋、1k。

部屋の隅に未開封の段ボールが積まれている。

床に二人の服が点々と落ちている。

静かな部屋で抱き合う二人。

窓の外は雨。
×　×　×
ベランダの手すりからしずくが落ちる。
廉、机の上に置いてある彼岸花の絵を見ている。
柚、お茶を持ってくる。
廉「これ柚さんが描かれたんですか？」
柚「え？　あ、そうです。落書きですけど」
廉「貰っちゃダメですか？」
柚「いいですけど、どうするんですか？」
廉「綺麗な絵なので額縁に入れて飾ります」
柚「やだ、そんなの飾らないでください」
廉「もう頂いたので俺の好きにさせてもらいます」
微笑む廉、柚の頬にキスをする。

○会社・休憩スペース（夕）
ひより、電話をかけている。
ひより「何で今出ないかなあ……（切る）」
男性社員「どこに電話してるの？」
ひより「（驚く）何ですか急に」
男性社員「こんな時に一生懸命電話してるから気になって」
ひより「どこだっていいじゃないですか」
男性社員「いいじゃん教えてよー」
ひより「……ムービー、流れるようになったんですか？」
男性社員「え？　（笑って）ムリムリ。俺には直せない。まー上田さんがなんとかしてくれるでしょ」
ひより「……（ムカ）」
男性社員、廊下を見て
男性社員「あ、上田さん！（向かう）」
ひより、廊下を見る。
エレベーターから出た上田を囲む社員たち。
女性社員「どうでした？」
上田「なんとかなったよ」
ひより、えっという顔。
社員たち「よかったー」

男性社員「誰が？　誰がやったんですか？」
上田「んー……ちょっとね」
上田たち、オフィスに入る。
ひより「……絶対廉くんじゃん」

○瑞木家・一階・居間（夜）
廉、テレビを見ている。
シシャモ、廉の匂いを嗅いでいる。
廉「何だよ」
和恵、小顔ローラーしながら。
和恵「美味しいものでも食べた？　お父さんがお昼にチキン食べた日みたいよ」
廉「何も食ってないよ」
和恵「いやー？　シーちゃんにはわかるんだろうな～」
廉自分の匂いを嗅ぐがわからない。
和恵「あっそうだ（チラシを出して）はい」
廉「（受け取る）何これ」
和恵「求人。スーパーの上のパソコン教室で先生募集してるっていうから貰ってきた。アンタパソコン得意でしょ？」
廉「得意じゃ―」
和恵「（指さす）いつまでも甘やかすつもりはないからね」
廉「……ハイ」

○アパート・柚の部屋（朝）
柚、絵を描いている。
その横で寝転んでいる廉。
廉「この田舎でパソコン教室ってどう思います？」
柚「通うんですか？」
廉「いや、教える方で」
柚「詳しいんですね。好きなんですか？」
廉「（考えて）……そうでもないですね」
柚、筆を置いて廉を見る。
柚「前はどんなお仕事を？」
廉「ゲームのバグ潰しです。作ったりもしてましたよ。恋愛、ホラー、格闘系。あ、最近ＣＭやってるＲＰＧも。冒険ものって作

り込みが多くて大変なんですけど、その分やりがいあって楽しいんですよ」
柚、絵に戻る。
柚「廉さんは、パソコンの先生には向いてませんね」
廉「えっ」
起きる廉、柚を回して向き合わせる。
廉「どうしてですか」
廉の真剣な顔に笑う柚。
柚「だって、ゲーム好きなんですよね？　作ったらいいじゃないですか」
廉「作りませんよ、会社辞めましたし。パソコンすら開いてないです」
柚「好きなことってそう簡単にやめられないんですよ。時間が空いてもちょっとしたきっかけで戻ってきちゃったり」
廉、よくわからない。
廉「ないと思います」
柚「今そう思ってたとしても、そのうちわかりますよ」
廉、納得いってない。

○瑞木家・一階・居間
廉、チラシを見ている。
シシャモ、チラシに飛びついて奪う。
廉「あっ」
シシャモが遊んでボロボロになっていくチラシ。
廉「あーあ……」
和恵、台所から顔を出す。
和恵「廉、お昼何にする―」
床が紙くずだらけ。
和恵「ちょっと！　何これ！」
廉「シシャモが……」
和恵「見てないで止めなさいよ！　シーちゃん！　ダメ！」
驚くシシャモ、あらゆるものを蹴散らす。
和恵「あーもう掃除したばっかりなのに」
和恵、廊下へ。

シシャモ、テレビのリモコンを蹴り落として逃走。
衝撃でテレビがつく。
廉、テレビを見る。
ＲＰＧのＣＭが流れる。
ゲーム主人公（声）「おかえり。さあ僕らの物語を始めようか」
廉「……」
素知らぬ顔で戻って来るシシャモ、トイレに入って踏ん張る。
廉「（笑う）何てことしてくれたんだよ」
廉、廊下へ。

○同・廊下から階段
和恵、掃除機を出している。
廉、階段へ。
和恵「あっねえ、お昼は？」
廉、階段を上る。
廉「いいー」
和恵「いいって、要らないってこと？」
廉「そー」
和恵「あっそう。ならお寿司でも取っちゃおうかなー」
和恵。階段をちらっと見る。
廉からの反応はない。
和恵「もう」

○同・二階・廉の部屋
部屋に入る廉、スーツケースからノートパソコンを取り出す。
勉強机にパソコンを置く廉、電源を入れて作業を始める。
机の隅に額縁に入った彼岸花の絵が飾られている。

○同（夜）
和恵、電気を点ける。
驚く廉、振り返る。
入口に立っている和恵、お茶とおにぎ

りを乗せたお盆を持っている。
和恵「何時だと思ってんの」
廉「え？」
廉、時計を見る。
時刻は二十三時半。
和恵「ちょっとは食べておきなさい」
和恵、パソコンをずらしてお盆を机に置く。
廉「ありがと……」
和恵「ほどほどにしなさいよー」
和恵、部屋を出る。
代わりに入ってくるシシャモ、廉の足を掻く。
廉「お前もう食ったろ」
シシャモ「んーなぁー」
机に飛び乗るシシャモ、エンターキーを踏む。
パソコンの画面にドット絵で描かれた水族館が映る。
暗い館内で泳ぐ魚たち。
水槽の前にはワイシャツと短パン姿の少年。

○ゲーム世界・水族館内（夜）
水族館の中を歩く少年、小銭や魚のエサなどのアイテムを収集して冒険する。

○同・ラボ（夜）
少年、真っ白な研究所を歩く。
大きな扉にたどり着くが開かない。
少年、近くのダクトを通って侵入。
シーラカンスが泳ぐ水槽の奥、一番大きな水槽で眠る人魚。
人魚、目を覚ます。
少年と人魚、目が合う。

○瑞木家・二階・廉の部屋（朝）
パソコンの画面に黒い背景に白い字で【Ｅｎｄ】が浮かんでいる。
ひげが生えて髪がぼさぼさの廉、椅子

から立ち上がると関節が鳴る。

○同・一階・居間（朝）
和恵、三人分の朝食を並べている。
廉、フラッとやってくる。
驚く豊と和恵。
和恵「やだみっともない！　ご飯の前にお風呂入ってきなさい！」
廉「……うん」
廉、風呂場へ。
シシャモ、廉についていく。
豊「……失恋でもしたのか」
和恵「こんな田舎にそんな相手居るわけないじゃない」
豊「けど、ご飯も食べないで部屋に引きこもって……」
和恵「好きなことやってんのよ」
豊「そうか、……そうなのか」
和恵「さてと、夜はすき焼きにしようかな」
豊「おっいいなあ」
シシャモ（声）「なあー」
和恵「何だろ」
和恵、風呂場へ。

○同・脱衣所（朝）
シシャモ、風呂場の前で鳴いている。
和恵「なあにシーちゃん。あなたお風呂嫌いじゃない」
シシャモ「ンー」
和恵、風呂場を見る。
水の音が聞こえない。
和恵「廉ー？」
返事がない。
和恵、ノック。
和恵「ちょっと？　ねえ開けるよ？」

○同・風呂場（朝）
和恵、戸を開ける。
廉の顔が湯船に浸かっている。
和恵「アンタァ！　その年で溺れたら洒落に

ならんよ！」
廉「（起きる）はっ」
和恵、戸を閉める。

○アパート・柚の部屋
柚、テストプレイをしている。
柚「これ本当に廉さんが一人で？」
廉「（眠い）はい」
柚「すごい……」
廉「主人公と魚、描いてくれませんか」
柚「えっ？」
廉「柚さん絵描けるじゃないですか。ほら、前貰った彼岸花とか」
柚「あー……。いやでも、人なんて描いたことないですし」
廉「ダメですか？」
柚「ダメというか、私の絵じゃ……」
廉「俺は柚さんの絵好きです」
柚「んー……（どうしよう）」
廉、寝る。
柚、廉を床に寝かせて布団をかける。
柚、パソコンの画面を見る。
画面には柚と向かい合うように少年が立っている。

○瑞木家・一階・居間（夕）
ゲージに入れられているシシャモ、出たがっている。
食卓の上にすき焼きの鍋。
廉「何かいいことあった？」
豊「そりゃ｜」
和恵「別にー？　お母さんが食べたかっただけ」
廉「？　そう」
シシャモ「んなあああ」
和恵「ごめんねー危ないからそこで我慢してねー」
シシャモ「おああああ」
廉「恨まれそう」
和恵「あとでおやつあげれば大丈夫。お父さ

んほど嫌われてないから」
豊「えっ」
和恵、豊の前にすき焼きを取り分けた皿を置く。
豊、シシャモを見る。
シシャモ、暴れている。
豊「嫌われ……」
和恵「いただきまーす」
廉「いただきます」
豊「……いただきます」
食べる豊、幸せそうな顔。
和恵、ふと気づいて。
和恵「電話鳴ってる」
廉「え？」
廉、携帯を見る。
ひよりからの着信。
しばらく見ている廉、携帯を持って自分の部屋へ。
和恵「ご飯は？」
廉「すぐ戻る」

○喫茶店・店内
人が少ない店内。
ひより、紅茶を飲む。
廉の前にはコーヒー。
ひより「バグ直したの廉くんでしょ」
廉「……。他に、優秀な人がいるかもよ」
ひより「例えば？」
廉「さあ、俺は辞めた人間だから」
ひより「……何それ」
雨が降り始める。
ひより、窓の外を見る。
廉、コーヒーを飲む。
ひより「雨……」
廉、カップを下ろして外を見るが興味なさげ。
ひより、廉の様子を見て。
ひより「昔、傘に入れてくれたの。廉くんは覚えてないか」

○回想・会社前（夕）
雨が降っている。
会社から出てくるひより（２５）、溜息を吐く。
ひより、鞄に手を入れる。
横から傘が差し出される。
横を見るひより、傘を持った廉（２９）がいる。
廉「駅までよければ」
ひよりの鞄の中に折り畳み傘。
ひより、鞄を閉じて。
ひより「お言葉に甘えて」
二人、一つの傘に入って歩き出す。

○喫茶店・店内
廉「覚えてるよ」
お冷の氷が音を立てる。
ひより「（ぼそっと）ずるいな……」
グラスのしずくが一滴落ちる。
ひより「……ごめんね」
入店音にかき消される。
廉「ん？」
店員とカップルが二人の横を通る。
ひより、何もなかったように。
ひより「戻ってきたら？　席、まだあるよ。今なら歓迎されるんじゃない？」
廉「……」
ひより「廉くん、あたしにこう言われるの待ってたんでしょ？」
微笑むひよりに廉は笑顔を返さない。
廉「戻らない。むしろ辞めてよかったと思ってるよ。それで気づくことがたくさんあったから」
ひより「デバックしかできないのに？」
廉「そうでもないよ」
ひより「仕事は？」
廉「これからなんとかする。苦労するかもしれないけど」
ひより「だったら戻ってくればいいじゃん。噂だってもうみんな忘れてる」

廉「消えてはないだろ？」
ひより「廉くんはそれでいいの？　悔しくないの？」
廉「必要なことだったんだよ」
ひより「……何か、廉くん変わった」
廉「そう？」
ひより「うん。つまんない、ヤな感じ」
廉「……俺は、昔の自分の方が嫌いだな」
廉、コーヒーを飲んで一息つく。
廉「……あのさ―」
ひより「いいやもう勝手にすれば？　あたし、思い通りにならない人好きじゃないんだよね」
廉「―……、それは残念」

○喫茶店・外
ひよりと廉、店から出てくる。
廉「傘、あるよね。いつも鞄に入れてたし」
ひより「……知ってたんだ」
廉「うん」
ひより「……やっぱり、今の廉くん嫌い」
傘をさす廉、微笑んで。
廉「じゃあ（歩き出す）」
ひより、しばらく廉を見つめている。
ひより「……バイバイ」
ひより、傘を差さずに歩き出し、途中で涙を拭う。

○オフィス街・ケーキ屋前
廉、年季が入った老舗のケーキ屋の前でふと立ち止まる。

○アパート・柚の部屋（夕）
絵を描いている柚、その周りにくしゃくしゃに丸められた紙がたくさん転がっている。
柚、描きかけの絵をぐしゃぐしゃに丸める。
チャイムが鳴る。
柚、丸めた紙を捨てて玄関へ。

○同・前（夕）
扉を開けると目の前に廉。
廉、柚を抱きしめる。
柚「どうしたんですか？」
廉「うん……」
廉、柚にキス。
扉が閉まる。

○同・部屋（夕）
柚、机の上を片付ける。
廉「お土産があるんです」
廉、ケーキの箱を開ける。
中には桃のショートケーキが二つ。
驚く柚、顔が固まる。
廉「通りかかった店に偶然売っていて。お皿とフォーク借りますね」
廉、取りに行く。
戻って来る廉、フォークを差し出す。
廉「はい」
柚「ありがとう……（受け取る）」
廉、ケーキを皿に移してそれぞれの前に置く。
廉「今まで頑張ったご褒美ですね」
柚「……そう、ですね」
泣きそうになる柚、誤魔化して笑う。
廉「いただきます」
柚「……いただきます」
廉、食べる。
廉「ん、缶詰だ」
柚「（食べる）缶詰も美味しいです」

○同（夜）
柚、台所のシンクにバケツの水を流す。
軽くゆすいでまた水を入れる。
机の前に座る柚、筆をとる。
床に魚や花の絵。
描きかけの少年の絵がある。

○同（日替わり）

廉、絵を見ている。
廉「すごい。すごいです！」
柚「よかった、喜んでもらえて。頑張ったかいがありました」
廉「あっ材料費とか払います。謝礼も」
柚「いいです。こんなのでもらったら申し訳ないんで」
廉「でも」
柚「本当に、勘弁してください」
廉「……柚さんの絵は払う価値ありますよ」
驚く柚、嬉しそうに笑う。

○瑞木家・二階・廉の部屋（夕）
廉、勉強机でパソコンを開いている。
廉、完成したゲームデータをフリーゲームサイトにアップロードする。
やってくるシシャモ、入り口で座る。
シシャモ「にゃあん」
廉「（振り返る）どうした」
和恵（声）「れーん、ご飯！」
廉「はーい」
廉、画面を確認。
アップロード完了の文字。
シシャモ、居間へ。
廉、ついていく。

○同・一階・居間（夕）
廉、空いた皿を台所に運ぶ。
豊、お茶を飲みながらテレビを見ている。
廉「……（台所へ）」
廉、ゲームソフトを手に戻ってきて豊の横に座る。
豊「？」
廉「このあとゲームやらない？」
豊「……！　いいぞ！　対戦するか！？」
× ×
廉と豊、テレビゲームをする。
モンスターに倒される廉と豊。
和恵、参戦。

三人でゲームをする。

○同・二階・廉の部屋（夕）
机の上で開いたままのパソコン。
ゲームにコメントがつく。
≪綺麗なのにどこか寂しさがある≫≪続編希望≫≪絵が好き≫≪これがフリーでいいのか≫≪お金を払わせてほしい≫≪絵師を知りたい≫

○アパート・柚の部屋（朝）
廉「見せたいものがあって」
廉、柚にパソコンの画面を見せる。
廉「ほらこれ、絵が綺麗って。やっぱり柚さんにお願いしてよかったです」
柚「あんな絵で……」
廉「何を言ってるんですか。柚さんの絵はすごく素敵なんですよ」

× ×

二人、抱き合うように寝ている。
目を覚ます柚、物思いにふける。
窓から風が入る。
部屋の隅に積まれていた紙が舞う。
花や魚、少年の絵がひらひら。
柚、拾って片付ける。
柚、自分の手が絵の具だらけなのに気付く。
柚、持っている少年の絵を見る。
少年と人魚が見つめ合っている絵。

○瑞木家・一階・居間
廉、ゲーム制作ツールで新しいゲームを作っている。
和恵、掃除機をかける。
和恵「邪魔邪魔」
廉「どくからちょっと待って」
廉、パソコンを持って立ち上がる。
足元でシシャモが暴れる。
廉「ちょっシシャモどうにかして」
和恵「ムリムリ。シーちゃんも持ってって」

廉「無茶言うなよ」

○同・縁側

和恵、洗濯物を干す。

廉、タオルの塊をほぐしている。

和恵「アンタいつもどこ行ってるの」

廉「え？」

和恵「最近ふらっとどこか行くじゃない。何しに行ってるの？」

廉「……散歩」

和恵「怪し〜」

シシャモ「なあー」

和恵「シーちゃんもそう思うよねー」

廉「何だよ……」

○同・二階・廉の部屋（夜）

廉、パソコンを見ている。

画面には賃貸サイト。

メールが届く。

廉、開く。

企業からのゲーム制作依頼メール。

廉「……」

廉、椅子に座ったまま回る。

入り口に立っている和恵。

廉「（驚く）おわっ！」

廉、パソコンを閉じる。

廉「何、びっくりするじゃん」

和恵「人を幽霊扱いして。失礼しちゃう」

和恵、部屋に入ってサンドイッチとお茶を乗せたお盆を置く。

和恵「夜食」

廉「ありがと……」

和恵、彼岸花の絵に気づく。

和恵「綺麗な絵」

廉「ん？　（絵を見る）ああ、これ」

和恵「頑張んなさいよ」

廉「え？　何」

和恵「独立、そういう花言葉があるの。他にもいくつかあったはずだけど」

廉「へえ」

和恵「食べ終わったら水につけておいて」
廉「洗っとくよ」
和恵「いいの、それくらいやるから」
廉「……？　わかった」
　和恵、部屋を出る。

○同・一階・縁側（朝）
　シシャモ、顔を洗っている。

○バス停・待合スペース（朝）
　ベンチに座っている柚、指に付いた絵の具を見ている。
　やってくるみつ子。
みつ子「こんにちは」
柚「（はっとして）あっこんにちは」
みつ子「お隣、いい？」
柚「どうぞ」
　みつ子、ベンチに腰を掛ける。
みつ子「指先がかわいらしいわね」
柚「あ、これは絵の具の汚れで、すみません汚くて」
みつ子「あなた、絵がお好きなのね」
柚「……、はい」
みつ子「ならこれは勲章。ちっとも汚くなんてないわ。誇りなさい」
　柚、手を握りこむ。
柚「ありがとう、ございます」
みつ子「良いお顔になったわね。誰か良いお方が居るのかしら」
柚「……」一緒に居たい人が居るんです。でも、（指を見て）これも頑張りたい。どちらも捨てがたい私はわがままなんでしょうか」
　微笑むみつ子、外を見る。
みつ子「空から降った水が、どこに行きつくかあなたは知ってる？」
柚「？　……いえ。川とか海ですか？」
みつ子「そうね、そうかもしれない。けれど、（水たまりを指す）あの水が全部、海や川に行ったかどうかなんて誰もわからない」
　みつ子、柚を見る。

みつ子「恋もそう。人生だってそうなの。どこに行くか、どうなるかわからない。だから不安になるけど、そうじゃないのよ。どこに行ってもいい、どうなってもいいの。幸せであるなら、それでいいの」
みつ子、柚の手を握る。
みつ子「大事にしなさい。行方知らぬものでも、たとえ手放してしてしまったとしても。大切に思っていれば巡り巡ってまたあなたの元へ戻ってくる。私はそう信じてる」
柚「……」
幸三（声）「あーっ居た！」
柚、はっと外を見る。
待合スペースの前に止まる軽トラ。
幸三、軽トラから下りる。
幸三「スーパーの外で待っててって言っただろ。なんでこんなところに居るんだよ」
みつ子「（聞こえない）えー？」
幸三「まったく。帰るよ！」
みつ子「ああ、はいはい」
みつ子、立ち上がって軽トラへ。
幸三「ごめんね、こんなばあさんの相手してもらって。あ、乗る？」
柚「……。いえ、一人で大丈夫です」
幸三「そっか」
みつ子、振り返る。
みつ子「さようなら柚さん」
柚「……さよなら、みつ子さん」
みつ子、軽トラに乗る。
ドアを閉める幸三、反対から乗って軽トラを出す。
みつ子、柚に手を振る。
柚、手を振り返す。

○アパート・柚の部屋
家に帰ってくる柚、段ボールを出して組み立てる。

○瑞木家・一階・縁側
廉、シシャモと昼寝をしている。

和恵、廉を叩き起こす。
目を覚ます廉、和恵を見上げる。
廉「え、何？」
和恵「ケチャップ買ってきて」
廉「あー……うん、わかった」
廉、起きて玄関へ。

○同・玄関
廉、靴を履く。
和恵、シシャモを抱えてやってくる。
和恵「傘持って行きなさいよ？」
廉「んー……いいよ」
和恵「ふーん、そう」
廉「いってきます」
和恵「よろしくー」
廉、家を出る。

○スーパーかきや・店内
調味料コーナーで物色する廉、ケチャップを取ってレジへ。

○同・外
買い物袋を持つ廉、出てくる。

○ケーキ屋・前
一度通り過ぎる廉、戻ってくる。
廉、中へ。

○田んぼ脇・砂利道
廉、買い物袋とケーキの箱を持って歩く。
軽トラが通り過ぎる。
ふと足が止まる廉、振り返る。

○瑞木家・一階・玄関
廉、駆け込む。
廉「母さん自転車！　自転車貸して！」
和恵、慌てて台所から出てくる。
和恵「いいけど、錆がひどいよ」
廉「いいよ！」

廉、荷物を置いて中庭へ。
和恵、ケーキの箱に気づく。

○同・縁側
廉、自転車を出している。
和恵「ねえ、ケーキ！　どうしたの！」
廉、和恵が持っている箱を見て。
廉「え？　ああ、あげる！」
廉、自転車に乗って飛び出す。
和恵「なあにもう」
和恵、箱を開ける。
中に缶詰ではない桃のショートケーキが二つ。
和恵「あら美味しそう」

○田んぼ脇・砂利道
廉、自転車を立ち漕ぎ。
柚の家へ向かう。

○アパート・外
廉、自転車を乗り捨てて柚の部屋へ。

○同・部屋前
廉、チャイムを何度も押す。
焦る廉、ドアを叩こうとする。
扉が開いて柚が顔を出す。
廉、ほっとする。
柚「どうぞ」
廉、入る。

○同・部屋
玄関のすぐ横に段ボールと畳まれた机が置いてある。
部屋の中にあった荷物がほとんどない。
柚、荷造りの続きをする。
廉「出て行くんですか……？」
柚「はい」
廉「どうして。何か不満があるなら言ってください」
柚「いえ、不満なんて何も。この町はとても

居心地がいいです」
廉「なら何で……」
柚「廉さんが私の絵を褒めてくれたじゃないですか」
廉「……？　はい」
柚「あれすごく嬉しかったんです。何も出来ないまま生きていくと思ってた私が、初めて夢中になれたんです」
廉「……絵はここでも描けますよね？」
柚「描けます。でも、私は自分一人だけで立てるようになりたいんです」
廉「俺が居ちゃダメなんですか？」
柚、首を振る。
柚「廉さんと居るとすごく安心するんです。優しくて大切にしてくれるから私もつい頼ってしまう。けど、甘えてばかりじゃダメなんです。そのうち依存するようになります」
廉「依存は悪いことじゃないです。全部捨てて、この町に来たんですよね？　ならずっと居ればいい。無理して出て行くことはないんですよ」
柚「捨てて、空っぽになって、それで終わりたくはないんです」
廉、段ボールをどかして柚の前に座る。
廉「俺はここに居てほしいです」
柚、優しく微笑み、首を振る。
柚「廉さんは一人であんな素敵なゲームを作れるでしょう？　そんなすごい人の隣に、今の私は立てない。廉さんがこのままでいいと言ってくれても、私がダメなんです。きっと前を向けない」
柚、白い彼岸花の絵を差し出す。
柚「よかったら貰ってください。前にあげた絵じゃなんだか寂しいので」
絵を見る廉、泣きそうに顔がゆがむ。
柚「彼岸花って赤だけじゃなくて白もあるって知ってました？　色によって花言葉も―」
廉「別れの花なんて嫌です」
廉、柚の腕をつかむ。

廉「……居なくならないでください。俺は、柚さんと、ずっと一緒に居たい」
柚「……嬉しいです」
廉、柚を見る。
廉「あなたと居ると息ができるんです。溺れてる俺を助けようとはせず、一緒に浮かんでたまに沈んでくれるような、そんなあなたがいいんです」
柚「沈んでていい人間なんて、居ないんですよ」
何も言えない廉、柚の手を握る。
柚「手放してしまったものでも、巡り巡って返ってくるのであれば、好きになれた私でまた廉さんと巡り会いたい」
柚、廉に絵を持たせる。
廉、柚を抱きしめる。
柚、廉の体に腕を回す。
柚「廉さんに会えてよかった」
廉「……俺も、柚さんと会えて……（消えるように）よかった」

○同・外
業者、荷物を軽トラに運ぶ。
アパートのそばにレンギョウの花が咲いている。
柚、花を見て。
柚「綺麗な花ですね」
廉、柚と同じところを見る。
廉「何ていう花なんでしょうね」
柚「わかりませんが、きっといい花言葉があります」
業者「終わりましたー」
柚「ありがとうございます」
柚、軽トラに駆け寄り、ドアに手をかける。
柚「ゲーム、止めないでくださいね」
廉「……やめ、ないです」
嬉しそうに笑う柚、軽トラに乗る。
軽トラが発進する。
廉、見ている。

柚、窓から体を乗り出して手を振る。
廉、同じように手を振る。
軽トラが見えなくなる。
廉、手を下ろす。
廉、携帯で電話を掛ける。
廉「……あ、もしもし。今大丈夫ですか？　……その、上田さんに相談がありまして」
風がレンギョウの花を揺らす。

○イベントホール・会場・二年後
T【二年後】
ゲーム博覧会が開催されている。
広い会場内に各企業がブースを作り、新作のゲームを発表している。
一か所に大勢の人が集まっている。
壁に設置された画面にＲＰＧのプロモーションビデオが流れている。
壮大な自然の中を駆ける民族衣装を着た少年。
周りの壁に水族館のゲームの資料や絵が貼られている。
洒落たスーツを着た上田（４８）、企業の営業と名刺交換をしている。
営業「いやあ凄いですね。こんな綺麗な映像は久々に拝見しましたよ」
上田「ありがとうございます。キャラクターデザインは昔なじみの方にお願いして、あとは彼が頑張ってくれました」
上田、廉を見る。
スーツを着た廉（３２）、他の企業の営業と話をしている。
営業「あの方が？　まだ若いでしょう？」
上田「ええ、まあ。とてもいい相棒です」
×　×　×
各企業、片づけをしている。
すっかり片付いた廉たちのブース。
廉、資料をまとめている。
上田「廉くん、僕このあともう少し話していくから、（腕時計を見る）先にご飯食べて会社戻っててくれる？」

廉「わかりました」
廉、資料を鞄に入れる。
廉「ではお先です」
上田、手を振る。
廉、軽く手を振る。

○同・外
廉、ホールから出る。
携帯で店を探す廉、歩き出す。

○商店街
飲食店や古本屋が軒を連ねる。
廉、色んな飲食店の前に立ち止まるが
惹かれない。
雨が降り出す。
廉、駆け足。

○アトリエ・前
古い雰囲気の中で少し浮いている新し
めの綺麗な外観。
走ってくる廉、雨宿り。
足元を見ると個展の看板が表に出てい
る。
廉、アトリエに入る。

○同・内
入ってすぐの場所に切り絵が飾られて
いる。
その先に写真やアクセサリー、陶芸な
ど様々な作品が展示され、各作品の下
に題名と作者のボート。横にＳＮＳな
どの連絡先のボードが貼ってある。
廉、じっくり見て回る。
絵画のコーナーに入る。
廉、レンギョウの絵の前で足が止まる。
作者の名前が日下部柚。
後ろからやってくる柚（３２）、廉の横
に立つ。
柚「レンギョウの花です。春先から夏にかけ
て咲く花なんです」

廉、柚を見る。
清楚なニットとフレアスカート姿の柚、
微笑む。
柚「お久しぶりです」
廉「……お久しぶり、です」
柚「立ち寄ってくれたんですか？」
廉「仕事の帰りに、偶然見かけて」
柚「不思議な偶然ですね」
廉「ですね……」
柚、絵を見上げる。
柚「花言葉は希望だそうですよ」
廉、同じように見上げる。
廉「いい花言葉ですね」
柚「私も、そう思います」
廉、柚を見て微笑む。
廉「お元気そうで何よりです」
柚「廉さんも」
廉「柚さんのおかげです」
柚「そうなんですか？」
廉「はい」
廉、鞄を開いて名刺入れを探す。
廉「今、ゲーム制作の仕事をしているんです。新しく起ち上げた会社なので色々苦労しますけど、好きなことを存分にやってます」
柚「それは良かった。じゃあ、今は社長さんなんですか？」
廉、名刺を出す。
廉「いやいや、副です。普通の社員が良かったんですけど、二人しか居ないので仕方なく」
柚、名刺を受け取る。
柚「すごいですね」
廉「柚さんこそ（絵を見る）」
柚、絵を見る。
廉「（ふと）……白い彼岸花」
柚、廉を見る。
廉「今も大切にしてます」
柚「……花言葉調べたんですか」
廉「はい」
柚、照れくさそうに笑う。

二人、絵を見上げて少しの間沈黙。
廉、柚を見る。
廉「あの……」
柚、廉を見る。
廉「……あれ以来、桃のショートケーキにハマりまして、色々店を回ったんです。でも意外とないんですよね、イチゴはあっても桃って。たまにあっても缶詰だったり」
柚、廉の言葉を待つ。
廉「それで、その、……個人的に好きな店があるんですけど、よかったら今度、一緒に行きませんか？」
柚、笑う。
柚「はい、ぜひ」

終わり